



日本国駐在フランス共和国大使フィリップ・フォール閣下後援による
日本国国会議員との対話

2009年4月21日 衆議院第二議員会館第1会議室

小児科医・医学博士 **アルド・ナウリ**

「たとえ離れて暮らしていたとしても、

親と子の交流は子どもが健全に育つために必要です」

はじめに自己紹介をさせて頂きたく存じます。私はアルド・ナウリと申します。パリ大学医学部およびパリの諸病院の小児科専門の医師であります。私は40年にわたりフランスのパリで仕事をしてまいりました。そして社会階層も民族的出自も様々な2万ほどの家族と出会うことになりました。このことから私は家族の世界に関する限り豊富な経験を持つものと自負しております。

この家族という世界のもつ複雑な問題を扱うために、私は自分の受けた医学的教育だけでは満足することができず、さらに心理学をソルボンヌ大学にて、文化人類学をコレージュ・ド・フランスにて、言語学を社会科学高等研究院にて、そして精神分析学をパリのフロイト学派のもとで学びました。

私はこの領域において、専門家の中でそれなりの高い評価をいただいております。おかげで多くの学会で発言をし、専門雑誌に多くの論文を掲載させていただいております。また多くの本を執筆し発表しており、共著のものが50冊ほど、そして単著のものが14冊ほどございます。それらの著作はすべて、家族の中で織りなされる諸関係の様々な側面、そしてその変化について論じておりますが、それはまさに現代の世界において大きな問題となっていることでもあります。これらの私の著作はいずれも大きな反響を呼び、ヨーロッパの多くの国々で重要参考文献となっております。それらはまだ日本語には訳されておりませんが、他の多くの言語に翻訳されております。私の本はこうして数百万の読者を得ることになり、私は相当な数の手紙を受け取るようになりました。

私は2002年12月に日本を訪れる榮譽に浴しましたが、その時の旅行の思い出、東京、仙台、大阪で私が行った講演の際に素晴らしい歓迎を受けた思い出が深く心に残っております。

本日もわたしは同じような喜びを感じております。本日はさらに皆様方の前でお話しさせていただくという格別の榮譽に浴し、一層光栄に感じております。

そして、私のお話にこうしてお耳を傾けていただけることを皆様にあらかじめ深く感謝申し上げます。

私が皆様にお話しするようにと依頼されております問題は、なぜ子供にとって、人生全体とまでは言わないまでもその成長期の全体を通じて、両親の「双方」およびその双方の家族とできる限り緊密な接触をもつことが不可欠とまでは言わずとも重要であるのか、という問題です。

私がこれからさせていただくお話は、私の受けた複数の専門的教育から学んだこと、私自身の医師としての職業的経験から学んだこと、そして数多くの人々との出会いから学んだことをもとにして進めてまいりたいと思います。

とは言いまでも、私は還元主義的に話を進めようとするものではありません。私は自分の性格上、物事の進め方を画一化してしまうことには反対するものです。私は、むしろ違いというものを本当の豊かさとしてとても尊重するものであります。私自身4つの異なった文化と親密な関係を持つ機会に恵まれ、そこから多くの良きものを得たということができると思います。例えば、私が診察室で出会うことになった48の異なる民族のそれぞれの生き方や考え方、反応の仕方に私の専門的なアドバイスを適応させていくことができたのもそのおかげであります。

私たちは皆、異なる文明ごとにそして異なる文化ごとにそれぞれの生活様式があることを確かに知っております。それは実際に言語の違いが示しているところでもあります。しかし私が見るところでは、言語というものが、大昔から形作られ、無意識のうちに私たちの行動の全体とは言わずとも大部分を規定する数多くのコードを形成している、ということがあまり十分に強調されていないように思います。

ですから、ある文明におけるやり方が他の文明のそれよりも優れている、と主張するようなことは私にとって意味をもちません。それぞれの国にそれぞれのやり方があり、いかなる意味においても、それが他の国のやり方と比べて優れているとか劣っているとかいうことはありません。ある国が今あるやり方を選んだということには、常に優れた理由があります。それは地理的環境およびその社会の設計に適う理由なのです。人類の歴史はそのことを証しています。例えばある民が他の民を征服した場合においても、自分たちのやり方を被征服民に押しつける民がいる一方、逆に被征服国のやり方を取り入れる民もいることを私たちは知っています。また、むしろ島の中にひきこもって独特の行動様式や精神性を発達させる民もいました。例として、今なお記憶に残るロンドン・タイムズのある見出しを挙げておきましょう。それは20世紀初頭のことですが、当時猛威をふるった大きな嵐について伝えるものでした。その文面―「英仏海峡大荒れ―大陸は孤立」―は、もちろん、英国人の有名なユーモア・センスを示すものですが、一方でそれが独立精神を培ってきた英国人の揺るぎなき誇りを示している、といっても実際のところ間違いとは言えないでしょう。

とはいえ人間は、いかに個々人の間の違いや民族、文化、言語の違いがあるとはいえ、同じものであり、その基本的要求や彼をとりまく状況への感応性において厳密に同じものであるということも明らかです。このことは、私たちがグローバル化した世界に生きているこの現代において、しっかりと確認しておくべき事実であります。そこでは人がその地理的環境の変化に対応しなければいけない状況―例えば移民の場合がそうです―や、もしくは人がそれまで組み込まれていた社会の設計が急激に変化する状況が生まれてきます―旧ユーゴスラビアや旧ソ連の分割のケースがそれです。そうした中で自分たちに提案された解決法を目の前にしたとき、多少とも解消の困難な問題が生じてくることがあるのです。

ひとつ小さな具体例を挙げてみましょう。

私はある夫婦を診察することになりましたが、彼らは子供を連れずにやってきました。

子供の父親は日本人の高級官僚であり、母親はスウェーデン人でした。

彼らはフランスにすでに10年前から住んでいて、どちらも完璧なフランス語を話しました。彼らには9歳、7歳、そして5歳の子供がいました。彼らは数年来の彼らの不和を解決しようとして私に会いに来たのでした。

彼らは大きな紙を取り出し、そこには日常生活において彼らのはっきりと対立し合っている19の

問題点が列挙されていました。

私はもちろん皆様にそのリストの中身をお知らせするわけではありません。実際私はそれを忘れてしまいました—ただ、その中の初めの二つの点だけ、私にはとってそれ自体で状況全体を見事に示していると思われる初めの二つの問題点についてだけお話ししたいと思います。

第1の問題点：日本では普通、子供にごはんを一粒もお茶碗に残さないように言い、食事は最後まで食べさせる。スウェーデンでも同じく食事は最後まで残さず食べるようにしつけるが、その際、飢餓で苦しんでいる子供たちがいることを話して倫理的強制力にうったえる。フランスでは、子供にわりやり食べさせてはいけないと言われる。

第2の問題点：日本では子供は普通に両親の寝床で寝る。スウェーデンでは子供は病気の時だけ両親のベッドに来ることが許される。フランスでは子供は両親のベッドには絶対入ってはいけないと言われる。

そして、これらのいずれの項目にも末尾に「どうすればいいのでしょうか？」という疑問符がつけられていました。

このような状況は、例えば2世紀前であれば絶対に起こり得なかったものです。

といっても別にその時代にスウェーデン女性が日本人の高級官僚と出会うことが不可能だったからではなく、その逆でもありません。そうではなくて、二人のどちらにとっても、そして彼らの環境、双方の家族にとっても、子供が父親と同じく日本人となり日本のしきたりに従って育てられるのが当然と思われたであろうからです。

今日の私たちはそれとはまったく異なった状況にあります。

特に技術先進国の社会においてそうなのです。

さらに正確に言えば、それらの社会もかつては家族における父親の地位を保証していたのですが、それをやめることにして以来、このようになってきたのです。それに並行して自ずと子どもと母親のつながりが強められ、そのことをあえて問題視することは不適切と思えるまでになりました。

このような状況に至った経緯をここでたどることはいたしません、それが確かな事実であることはどなたにも確認していただけることであります。

ここでわたしが試みたいのは、その原因となったものとその結果としてもたらされたものについて検討することです。

そしてそのために私は、可能な限り一番基本的な状況から、つまりそれをめぐってすべてが展開していくものから出発したいと思います：それは父親、母親、子供の三角関係であります。人間はいかなる環境、言語、文明の中に生れようとも、この三角関係を出発点にして形成されます。

ところで、この有名な三角関係の中で個人個人の間関係が織りなされていくやり方は常に独特なものがありますが、それは

- ・2つの恒常的な特徴と
- ・1つの深い非対称性

を持つものであります。

私がこれから述べるところの2つの恒常的な特徴とは、すべてのケースにおいて例外なく当てはま

るものです。

恒常的な特徴の第一の点は—以前に比べ今日のほうがより明白に表れているのですが—圧倒的多数のケースにおいて、両親 2 人とも子供を持つことを望んだという事実由来します。つまり両親 2 人が決め、計画し、そして一緒にきちんと考えた上で、子供を作ったということです。

どうして彼らはある日その決断をしたのでしょうか？

それを知るためには、彼ら自身の言うことに耳を傾ければ十分でしょう。

彼らは彼らなりのことばで語ってくれるでしょう：2 人ともそれぞれに子どもに次のような理由で期待をかけていたのです。

- ・自分自身の死に対抗するため（「私は自分が受け継いだものを伝えたいから…」）
- ・子供を自分自身の延長としての存在にするため（「私の娘は私自身のより良い姿であってほしい…」）
- もしくは「私の息子には私ができなかった勉強をしてほしい…」

このことは、子供に対して父親側からも心的なエネルギーが注がれること、それは母親側からのものと同じくらい重要かつ強いことを示しています。

そしてそこから、以下のことが一部説明できます。

- ・別離に際し、両親の双方が激しく苦しむことになる理由。関係決裂の後で感じられる失敗感とは別に、この激しい苦しみは

＝母親においては、子供をその父親に預けなくてはならない時には、子供との日常的な接触が時々失われてしまうという思いによって生じ、

＝父親においては、自分の子供と今までと同じく自由に会うことができなくなる、という思いによって生じるのです。

- ・子供と面会する権利や子供のそばにとどまる権利を守るために両親双方が激しく争う理由。激しい争いの中で、ついには相手に同じ権利を認めないというところまで行ってしまうこともあります。ここにも一つの非対称性が入り込んでいます。というのも、一方の側は妊娠によって母と子の間に結ばれる本能的関係の名のもとに自分の権利を守ろうとするのに対し、もう一方の側は自分の母親の息子として、自分の母が自分と結んでいる本能的関係の痕跡を持っている者として、大いに苦勞して自分の子供に対する愛情の心的エネルギーの重要性を理解させ、認めさせようとするからです。

様々な色合いで表れるこの種の対立は、両親のいずれかの側によって相手に復讐するための手段としてよく使われます。

6 歳の男の子をもつカナダ人の父親は、自分のフランス人の妻が子供に母乳をずっと与え続けたがるのを非難していました。父親によれば、息子が母親と同じくらい自分にもなつくように、自分で哺乳瓶を使って子供に乳を飲ませたかったのですが、それを知った妻の方がわざと母乳にしているのがすでに気に食わなかったのです。私は彼の方が間違っていると言い、母乳への執着がいかなるものか、そして母乳のほうが人工乳よりいかに優れているか説明し、彼の理解を助けてあげようと思いました。彼が私の話にじっくり耳を傾ける様子を見て、私は自分の仕事がうまくいったと思いました。その翌日、若い母親から私に電話があり、彼女は泣きながら次のように言ったのです、あたしは夫の言うことを聞いてあげればよかった、あたしが頑固なので、夫はその仕返しに夜のうちに子供を連れ去り、カナダへ行ってしまった、と。

この父—母—子の三角関係に見出される恒常的な特徴の 2 点目は、子供が正しく自己形成していくためには、とりわけ自分のアイデンティティと社会的自己を正しく形成していくためには—つまり、きちんとした大人となるためには、その子供が両親それぞれの単なるイメージだけでなく、できるだけよいイメージを自分の中に持つことが「絶対に」必要であるということです。

このことは絶対に知っておくべきことであり、口に出して繰り返し言われるべきことなのです。それは、子供時代を通じて自己形成がいかになされるかが大人になってからの人生を文字通り規定する、と知っておくことが必要なのとまったく同じです。

両親が争って別れるという最も頻繁に生じるケースにおいて見られるように、片方の親がもう一方の親に対して行う批判が子供の心に与える打撃の大きさは実際想像を超えるものがあります。そこで一方の親がもう一方の親の尊厳を損なうようなことを行うと、子供の両親に対する忠実さが変質し、子供を深刻な心的葛藤状態に追い込み、子供はそこから逃れるすべを失います。子供はそこで自分を監護する親の側の道具となり、両親の対立においてあえて自分を監護する親の見方となり、人質になった者に見られる「ストックホルム症候群」と名付けられた心的状況を発展させてしまうことがあるのです。この状況は悲しいことに数年前からあまりにも頻繁に見られるので、多様な姿を持つひとつの病理学的対象としてとらえられるようになり、それが「片親引き離し症候群」と言われるものです。

こうした中で私は、7歳の時に両親が離婚したある15歳の少年に関わることになりました。母親の巧みな操作によって、早い段階で少年は父親と全然会わなくなりました。そしてそれ以来、彼があまりにも乱れた行動をとったことから、母親は彼を寄宿舎に入れました。そしてある日もう少しで最悪の結末を迎えるところまで行きました。彼が助かったのは本当に偶然の偶然でした。彼が首を吊ろうとしていたところにちょうど寄宿舎の舎監がやってきて彼を引き下ろしたのです。彼は泣きじゃくりながら、なぜそんなことをしたのかを私に語りました。彼が母親に手紙を書いて、父親に何としても会いたいと言ったところ、母親はその願いをどのようにあきらめさせたらいいか分からなかったので、父親に会わせるなど論外だ、なにせあなたの父親は……同性愛者なのよ、と返事を書いてきたということでした！

さらには小児愛の問題がメディアで大々的に取り上げられるようになって以来、子供が男の子であろうと女の子であろうと、母親が父親を、子供に性的な接触をしたとの理由で告発することが、子供と父親の面接交渉を禁止させるための母親側の戦略として常套手段となってしまうことは知られております。

ここで私が父親と母親のどちらか一方のみの味方をしようとしていると誤解していただければ困ります。父親の遭遇している問題の方を多くとりあげたのは、単にそちらの方が統計的に見てより頻繁に起こっているケースだから、という理由によります。もちろん父親が母親と同様に不当で不実なやり方をする場合もあります。フランスでは最近の多くのケースがそのことを示しています。子供への害という点では父親の場合も母親の場合も同様です。

私は自分の患者たちに次のように言うことにしていました。両親というのは2人で1つの脚立を作りあげているようなもので、子供はそこを登って人生に向かって乗り出していくのである、と。そこでもしどちらかが相手をつぶしてしまったら、脚立は倒れ、子供も一緒に落ちてしまう、と。

例えば私は、7歳の女の子が、彼女の離婚した両親が互いのことについて話すその仕方によって心的打撃を受けたのを治療しなければならないことがありました。その女の子は心引き裂かれ、深く落ち込み、いつも泣いており、よく眠ることもできず、学校へも行きたがりませんでした。それは長く困難なケースでした。そして私がこの苦労ももう少しで終わるところまで来たと思った時に、その女の子はとても当惑させる質問を私にしたのです。「男の人と女の方は自分たちが離婚することもあると知っているのに、なんでそれでも子供を作るのか教えてくださいませんか？」

「真実は子供の口から出る」とフランスの諺にあります。

例の女の子の質問は確かに、そのとき私がしたよりもいくらか丁寧に答えるべき問題を含んでいると思います。

以上、すべてのケースに見出される2つの恒常的な特徴を素描したので、ここから、父—母—子の三角関係において子供の両親カップルに影響を及ぼしている深い非対称性について話を進めていきたいと思います。

この非対称性は、フランスの文化人類学者クロード・レヴィ＝ストロースをして次のように言わしめたものです。「結婚は自然と文化との劇的な結合である」と。

この衝撃的な発言の中の言葉の一つ一つが、言わんとしているところ完全に示しています。「結合」というのはその状態のことを示し、「劇的な」というのはそれに伴う避けがたい緊張を示します。「自然」は女性、そして母を示し、「文化」は男性、そして父を示します

これは単なる意見、ひとつのイデオロギー、ひとつの勝手な見解でしょうか、それともすべて根拠のあるものでしょうか？

古生物学の教えるところによると、私たち人類という種が出現してから800万年になります。

さて、その800万年の間に人間の母親は、他の哺乳類の母親たちがやってきたように、そして今日もそうしているように、子供を産んできたわけです。

このことは母親に明らかに有利な立場を与えます。それは母親というものの地位の確かさということです。母親たちは自分が産んだ子供の母親であることが「確実」です。そしてこの確かさから、母親たちは、子供に対する自分の占めるべき地位を占めるという、反論の余地のない自然法の一つの形を引きだすのです。実際にローマ法では、マーテル・ケルティッシマ、つまり母親というのは極めて確実な存在である、と言い、パーテル・センハル・インケルトゥス＝常に不確実である父親、と対称的に扱いました。

こうした事情は長い間ずっと同じでした。しかし1970年以來、この確実性という地位をめぐって、実に多くのことが知られるようになり、とりわけ胎内期間が子供に及ぼす独特の影響について多くのことが分かってきました。

そこで実際に明らかにされたことは、懐胎期間において、胎児の感覚脳は、実に多くの感覚を記憶しているということです。これらの感覚はすべて例外なく母親の体から来るものです。胎児がこうして集めたデータがよく保存されているおかげで、子供は生まれてすぐに次のもの感じ分けることが可能であることが明らかになっています。

—母親の匂い

—母親の好む食品の味

—母親の手触り

—母親が自分を抱くときの抱き方

—母親の声

—脳の感覚野は互いに結び付いているので、子供は子宮の暗闇の中にあつて視覚的感覚を全く蓄積していないにもかかわらず、たった8時間彼女の前にいるだけで、もう彼女を写真で見わけることができるのです。

こうして母親と子供の間には出生の時点を超えた関係がすでに築かれており、その関係は、圧倒的な強さと信頼度をもつゆえに一生通じて残っていくものであり、その後得たものをすべて屈折させてしまうほどのものなのです。

子供は、その発展の段階の内容と強度がいかなるものであろうと、こうして望むと望まずとに関わらず次のような性質を自然ともつようになるのです。

—本能的に母親に結びつけられ続ける

—母親に対して一貫して忠実であり続ける

—そして、お互い無意識のうちに、子供は母親が自分に対してもつ欲望すべてを成し遂げる

母親は子供の人生の最初の目印となり、子供は人生を通じて、必要な時には自由に彼女のもとへ助けを求めにくるのです。

彼女のほうもまた同じようにごく自然に、自分の子供、その誕生が彼女にとって栄光以外の何ものでもない自分の子供に対して一途に心的エネルギーを注ぐようになっていきます。

彼女は、妊娠期間中ずっと、成長していくこの生命体の要求を自らの肉体をもって完全に満たすことによって、確かに「命を与える＝産む」のです。それによって、彼女の内には本能的な性向、子供が決して何も欠けることがないように、子供のすべての必要と欲求を永遠に満たし続けるという性向が発達していくのです。こうして彼女は目を重ね、愛情の仕草を重ねるなかで、子供の周りにパーソナルな、無限に広がる子宮を作り上げることができるようになり、そしてそこから子供が外に出ることを許さなくなるのです。そうなるともう、その他のことは彼女にとって何も意味をもたなくなるでしょう。そして彼女は、パートナーとの関係と同時に自身の自己実現を何のためらいもなく犠牲にしてその自然的性向を優先し、母性の深淵へと落ち込んでいくのです。

常に満ち溢れた我々の社会において、もしこの自然的性向が野放し状態にされたら何が起こるか、容易に想像することができない者ならばその性向を喜ばしいことと思うでしょうが、とことんまで甘やかされた子供は、

—すべてが彼のためにあると思うようになり、

—そして努力という感覚を全く発達させず、

自分一人だけに注意を向け、

—いかなる場合にも、他人は皆、母親が自分に尽くすように自分に尽くすものだと思い、

家では自分の気分と気まぐれによってすべてを決める小暴君となり、

—自分が決めた時に自分が決めた場所で食べ、自分の部屋またはテレビの前で、周りとはコミュニケーションをとることなく、プレイステーションで遊びながら食べ、

—もし気が向いたら、時間のことは考えずに街に出てぶらつき、

—学校に行ったり、行かなかったりするが、そのことを母親や教師に報告する必要を感じず、

—彼に何かを禁じてもまったく効果がなく、彼の行動様式を変えることはなく

—もっと深刻な段階になると、以下のように病理学の域に至るのです。

- ・常習者のような強迫的行動の中に閉じこもる

- ・昼夜問わずコンピューターの前にへばりつく

- ・テレビの前で何時間もぼーっとしている

- ・「時間つぶし」としての価値しかもたないような不毛で無意味な活動に没頭する

- ・もしくは深刻な注意力障害や絶え間ない興奮状態といった症状が進行し、「活動亢進状態」と呼ばれるものによってでなければ、それを静めることはできなくなる

このような子供が、社会の構造や組織の中にポジティブな形で組み込まれることはまずないでしょう。もし彼が社会に入っていくとしても、何のためらいもなく他人を搾取する人間としてか、シニカルに他人を利用する人間としてその中に入っていくでしょう。

青年期の彼を待ち受ける運命は、軽犯罪と組織的犯罪グループへの出入りであり、成人の年になるころには周囲の者たちに大きな問題を引き起こすこととなります。

ある意味で次のようなことが言えるかもしれません。母親側の選択肢だけを優先する社会はとても残酷な社会となり、その中で個々人はそれぞれ自分の隣人の敵になる、と。これは、他の言い方をすれば、野蛮へと向かう道でありましょう。

ところで、この種の危険性をいくら知らされたとしても、その危険を避けることはますます困難になっていることが明らかです。

なぜでしょうか？

第一の理由は、私たちは皆、母親のお腹から生まれ、そしてすでに申しましたように、皆それぞれ人生を通じて母親の影響を受け続ける、ということによります。

第二には、子供時代の出来事とその後の人生すべてを全面的に決定づけるということを私たちが未だ認識も理解もできず、さらに受け入れることもできないでいることによります。

そして第三には、母親の側が、父親の役割は自分の役割とは異なるということを容易に認めることができず、また彼女がそうした違いもその有用性をも理解しないことによります。母親には自身の役割の確かさがあまりにもはっきり刻みこまれており、また自分の子供とあまりにも本能的に結びつながられているので、子供が自分以外の誰かを少しであっても必要とすることがありうるということ自分から自然に理解することができないのです。彼女が受け入れることができるのは、せいぜいのところ、子供の父親が自分を助け、いかなる場合も自分とまったく同じようにやるということです。しかし、父親が自分と違う意見を持つなどもってのほかであり、それを彼女に押しつけるなどはさらに論外ということになります。自分が子供をお腹に持っていた、という事実を盾にして、母親は自分が、そして自分だけが、子供に関するすべての権利を持っていると考えます。父親は確かに妊娠にかかわり、母親は確かに父親と子供を作りますが、母親は他のいかなる男ともそれを行うことが可能であったわけであるのに対し、一方父親は、彼女なしにはこの子供を作ることができなかつたであろうということになります！

そこにこそ、すべての困難とすべての誤解のもとがあり、それを取り除くことは極めて難しいのです。

なぜなら父親というものは男性として、男の性を持つものとして、何と言っても 30 万年ほど前に文化というものを作り出し、この人間という種の進化のもっとも重要な部分を担った男性たち、男の性を持つ者たちの後継者であるからです。

ある時、自分たちが所属する集団の女性をお互いに交換することを決めることによって重要な一歩を踏み出したのはこの男性たちなのです。そしてこの時点から、彼らも自分らの伴侶から生まれた子供たちに対し心的なエネルギーを注ぎ始めたのです。

もちろん彼らは直ちに母親の側からの抵抗と拒絶に会うことになりました。それが激しいものでしたので、男たちは母親たちをまずは力づくで服従させたのです。

といっても男たちは、自分たちの作る社会が発展していく過程において、自分たちの地位の正当性を確立する試みをあきらめることはしませんでした。

このプロセスは、歴史が示すように、とても難しいものであり、極めてゆっくりと行われました。

この試みの最初の段階はいまから約 1 万 2 千年から 1 万 5 千年前、農業や牧畜が定着した時期にあたります。そのころ男たちは生殖の過程において何らかの役に立っていました。それはまさに、大地に蒔かれ、植物を生じさせる種と同じであり、そして雌羊と交尾して子羊を産ませる雄羊と同じでした。

その後の中間の段階については、次のことだけを指摘しておきたいと思います。精子が観察されたのはようやく 1677 年になってからであり、生体外での受精が初めて観察されたのは 1875 年に過ぎず、配偶子の役割と染色体の役割が発見されるわずか数年前のことでした。

しかしながら、父親の重要性とその役割についての科学的証明がもたらされたのはやっと 1984 年

になってからでした。ある生物学者がすぐれた実験的方法によって胎盤とへその緒が父親起源のものであることを示すことに成功しました。

胎盤は妊娠の進展過程において一番重要な器官です。それは交換におけるフィルターおよび調整器の役割を果たします。胎盤のおかげで子供は母親に殺されずにすみ、母親は子供に殺されずにすむのです。この事実を考慮に入れば、父親の介在なしにはいかなることもできないということが理解できましょう。

ここから、次のことが示されたことになるでしょう。男性が手探りで獲得し、文化の出現以降急激に獲得した父親の地位というのは、結局のところ、まさにある形の権利をそれと知らぬまま行使することであったということになります。そして男性が獲得したこの父親の地位は延長され、実際に適応されて、結局もともと自然自体によって用意されていた仕組みにたどり着くことになったのだということになります。

母親の確実性というものの大きさが自然科学の圧倒的影響力によって支えられているような文脈の中で、もし父親の有用性や、同じくらい確実といえる父親の地位の重要性もきちんと示されていれば、それなりの影響があったに違いありません。ところが、それらについては実際のところ何も語られることがありませんでした。語るにはすでに時遅しであった、あまりにも遅すぎた、とでもいうかのよう！それは、私たちの社会の選んだ方向性がもはや変更のきかなくなった後であり、イメージ偏重の私たちの社会が、いかにも明らかで目に見える側面のみによって私たちの考え方を支配するようになり、妊娠した母親の大きなお腹に子供に対する絶対的な所有権利書を自動的に与えるようなことになった後であり、その上ついには人工授精技術によって開かれた生物学的操作によって、人間の生殖活動という冒険をその獣医学的側面にのみ還元してしまうようになった後だったのです。

ここまで私が示してきたことの主要部分は、ただ別れたカップルにだけ起こるといようなものではありません。それらは例外なくすべてのカップルの日常において起こるものなのです。母親と父親の間の潜在的な戦いは、実際のところ、親という条件そのものの中にある恒常的な特徴なのです。

私は 1985 年に一つの本を出版しました。この『父親にも一つの場所を』という本はベストセラーになりました。私はそこで多くの診察例を挙げて、子供の肉体的、精神的健康をむしろ深刻な問題は、父親の地位と重要性が子供の母親によって認められることによって、その後長きにわたって解消されたことを示しました。どれほど多くの行動障害、学年遅延、青少年犯罪、薬物中毒、無気力症がこの方法で解決されたことか、私は数えあげることができないくらいです。

ジェロームの父親は自分の 15 歳の息子が麻薬に手を出しているのを知り、息子を連れて私のところへ診察を受けに来ようとしてきました。私はまず父親の方とだけ会うことを求めました。私はそこで、彼が妻に必要とされなくなって離婚を求められ 2 年前に離婚したことを知りました。しかも彼は家の 3 階にある彼らの家族のマンションを、彼がその単独の所有者であるのにも関わらず妻に残してあげて、自分は 1 階のワンルームに住んでいるのです。多くの男性がこうしたタイプの行動をとり、それを男性らしい女性への思いやりであると思っています。しかし実際には彼らは妻に対して、小さい男の子が母親に対してするような仕方で振舞っているのです。

ジェロームは両親の別居から数ヶ月後、彼を喜ばせようと常に心を砕いている母親に頼んで、7 階の屋根裏部屋に一人住むことを許されました。そしてその時以来、すべての心配事が始まったのです。まずは学校をさぼることから始まり、家出、軽犯罪、そして最後には麻薬の使用へと至ったのです。

私はその父親と一緒に、まずは彼自身の個人史と彼らの夫婦関係の歩みを振り返りその最初から検討することを始めました。そして次に、父親と母親と一緒に診察し、彼らの夫婦関係の歩みに注目しました。ジェロームの父親に対しては、彼に見られる弱さの代わりに寛容さというもの、いかに非生産的なものであるかを示しました。4 回の診察の間に、私がジェロームと会うことになる前に、彼

はもうすでに母親のマンションに戻っていき、麻薬をやめただけでなく、父親が母親に再び結婚を申し込む場所に居合わせ深く感激していました。母親は大喜びで今までにないくらい父親を愛するようになっていたのです。

ことがこのように進んだのはなぜでしょうか？

この始まりはジェロームの母親が、多くの母親たちのように、自分以外の人の話を聞こうとしなかったことによります。彼女は自分自身を主に子供にささげ、自分が妻であることを忘れ、夫を持っていること、そして、夫というよりむしろ子供のような自分の夫が、自分の子供について何か意見することもあるのだということを忘れていたのです。こうして人質状態になったジェロームは、その状況に酔い、その限度がどこにあるのか探ろうとしました。彼は独立の部屋を要求し、次に、危険は承知の上で過激な行動に走りました。父親の振る舞いに変化し、その個人史が再検討され、父親が子供と妻に対し彼らの守るべき限度を示し、しっかりと決められた方向に向って夫婦関係が再構築されたことによって、息子もそして母親も癒されたのです。

同居する夫婦においても起こりうるこうした病理は、離婚の際には極めて深刻なものとなります。

少なくともフランスにおいて一般的に結婚したカップルの3分の1が、都市部では2分の1が離婚し、離婚率は毎年6パーセントずつ増え、状況は憂慮すべきものとなっており、できるだけ早急に対策がなされるべきところまで来ています。欧米では、子供の生物学上の父親と一緒にならず一人で子供を育てることを決心する女性の数がかなり増えていきます。フランスではその数は1979年の7万9千人から2005年には296万人となっており、それは今日の全家族数の20パーセントになります。

これは深刻なことでしょうか？ 私たちの時代は、上で見たようなことが流行となり、人工体外受精の華々しい成果によってそうした典型的なケースが増え続けていますが、私たちの時代のこうした状況の行きつく先はどのようなもののでしょうか？

私からの答えはかなり簡単なものです。

さしあたり、子供の日常生活に関しては、結局のところそれほど深刻な状況ではないと考えることもできましょう。確かに健康の問題、学校問題、行動の問題、社会性の障害などは起こります。しかし私たちの社会はそれらを調べ、なんとか解決するための手段をまだ持っているのです。いずれにせよ、そのために医学のような社会的機構が存在するのです。

本当のことを言えば、極めて心配なのは、こうした状況すべてが、直ちに修復への動きを示すことなく、むしろ世代を重ねるごとに相当悪化していくことです。いろいろな家族を相手にした長い経験をもとに私はそれを証言することができます。

離婚したカップルの子供たちは、他の子供たちに比べ離婚する率が高いこと—これは実際に離婚率の上昇が明らかに示していますが—に加え、彼らは一般に自分たちが知っている図式を同じように再生産するようになります。母親だけに育てられた女の子は、自分の子供の父親とあつという間に別れてしまい、自分の母のもとにその子供を連れていくことになるでしょう。また同じような背景を持つ男の子は、自分が作った子供の面倒を見ることなく、子供に対して全く自分の役割を果たさないでしょう。彼らがなぜそうした行動をとるかという点、彼ら自身の成長の過程において、大人の年齢に達するまで、彼らの父親が少しあってもそばにいるという経験をもつことができなかったからです。

ここで私は、あまり時間もないことですし、両親が異なる言語、異なる文明、異なる文化に属している場合に起こる深刻なアイデンティティーの問題について長々とお話しするつもりはございません。これらのケースにおいては、普通に想像しうるあらゆる結末に加え、大きく損なわれることになるの

は子供における深いアイデンティティの形成です。さらに、彼に対して行われるこの剥奪によって、このグローバリゼーションの時代において本来こうした子供が持ちうる計り知れないほどの豊かさへの潜在可能性が奪われてしまうのです。

単親家庭の子供たちについては、彼らは自分たちの経験した図式を繰り返す可能性がより強く、実際のところなかなか安定した家庭を作るにいたりません。そして彼ら自身が作る子供たちは、多くの場合、(親である)彼らの自身の母親によって育てられることになり、その母親はそれと知らずに自分の子供を際限なく幼稚な地位にとどめおいてあげることで満足させようと気を配るのです。

私はゲールという男の子をその誕生から青年期まで観察しました。彼の母親がごく初期に私に語ったところによると、その子は彼女がある男性と一夜だけ過ごして出来た子であって、その男性とはその後一度も会ってもいないし、その姓も名前すらも知らないとのことでした。彼女は私のもとに必要以上に頻繁に診察を受けに来ました。私が彼女にそのことを指摘したところ、彼女が私に言うには、息子に父親がいないので、私を男性の見本として息子に示したいからとのことでした。それから数年後のある日、私がすでに退職していた頃、ゲールから電話がありました。ある若い女性と関係ができて、間もなく父親になるということを私にぜひとも伝えたかったとのことでした。私は彼におめでとうと言い、彼の母が私に与えた父親の役割を果たし続け、その少し後には彼ら夫婦が赤ちゃんを私に見せに来たい、というのを受け入れました。それから数週間後、ゲールが突然泣きながら電話してきたので、私は驚きました。彼は妻と息子と別れたと言い、どうしてか分からない、でも自分には辛すぎた、彼にはもう耐えられない状況になったというのでした。私がいろいろアドバイスしたのにも関わらず、彼は8年の国外滞在となる契約にサインをして去って行ってしまいました。

結局のところ、問題となるのは社会の未来でありましょう。

上で見たような形で作られていく社会が、はたして私たちに作り上げる責任がある連帯感に満ち進歩する社会になるかという、それは疑わしいものです。

その社会は、子供じみて、壊れやすく、不寛容で、あらゆる快楽を自己中心的に消費する個人の集まり、そしてあまりにも心の奥深くから不安に苛まれているために、人がその行動に信頼を置くことのできない、そうした個人の集まりとしての社会になるでしょう。

御清聴ありがとうございました。もちろん皆様からのご質問に喜んでお答えいたしたく思います。

(備 考)

* この発言録は、ナウリ氏の講演したい内容を、そのまま日本語に翻訳しました。

この講演では、この中から抜粋して話をさせていただきますので、予めご了承ください。

問い合わせ

在外フランス人議会議員 コンシニ・ティエリ

メール t.consigny@assemblee-afe.fr (日本語可)

携 帯 090 4679 0709